

保育実習Ⅱにおける責任実習に関する事前指導について(2)

—責任実習の実際から見た事前指導のあり方—

山田 秀江

About Pre-Guidance Related to Responsibility Practice, Part of Practice Teaching in Child Care and Education II (2)

— An Ideal Method of Pre-Guidance as Observed from Implementation of Responsibility Practice —

Hidemi Yamada

本研究では前回の研究結果を元に保育実習Ⅱの事前指導実践と保育実習Ⅱ後に責任実習の実施状況についての調査を2年間にわたり繰り返し行った。その結果から今後のよりよい事前指導のあり方を探った結果「具体的な指導案作成指導」「設定型保育のグループ研究」「模擬保育」が重要であることがわかった。

Key words: 部分実習、主導型保育、設定型保育、事前指導、模擬保育

第1章 問題

1. 責任実習における事前指導について

2005年度の責任実習の実態調査と学生が望む事前指導についての調査結果から、事前指導のあり方について導き出すことができた。その結果について再度振り返り、事前指導のあり方について整理してみたい。

まず、総合実習についてであるが、実際に総合実習を行うというのは難しく、調査の結果13%の学生しか行っていないことが分かった。そこで、具体的な事前指導を考える前に、総合実習をどのような位置づけで行っていくか、内容など今後のあり方考えることが大きな課題であるということが明らかになった。

次に、責任実習としての部分実習については実施している学生が94%おり、丁寧な事前指導を行う必要があるということが分かった。

まず、事前指導のあり方考える上で、学生が理解しやすいように部分実習を内容別に大きく2つに分類した。一つは保育者主導型の保育である。具体的な保育内容は子どもたちを集めて、手遊び

をしたり、絵本や紙芝居を読んだり、エプロンシアターをして見せたりするものであり、保育者が中心となり保育を展開し、子どもたちは受身に聞いたり、見たり、真似たりする活動である。保育時間としては10分～20分程度行うものである。このような部分実習について「主導型保育」と定義づけた。

もう一つは一般的によく言われる設定保育というもので、保育者が活動を設定し、子どもたちが主体となって活動を展開していけるよう配慮し援助していくものである。具体的な保育内容は制作活動や運動遊び、劇遊びなどがある。保育時間としては30分～60分くらい行うものである。このような部分実習について「設定型保育」と定義づけた。

それぞれについて、具体的な事前指導の方法について整理してみたい。

主導型保育については、実態調査からその内容の大半が手遊び、絵本、紙芝居であった。そこで、手遊びの場合では、そのよさや子どもに与える影響など、手遊びとはどのような価値のあるものかという理論的な内容とともに、具体的な実演を行い手遊びのレパートリーを増やすということが重要だと分かった。また、絵本についても同様で、絵本の価値を伝え、発達段階にあった絵本を知らせることと、実際に絵本を読み、読み方や見せ方

* 四條畷学園短期大学 保育学科

または絵本の選び方などを具体的に示していく必要があるということが分かった。さらに、大型絵本や大型紙芝居、パネルシアター、エプロンシアターなど主導型保育を行う上で有効な教材についても伝えたり、実演指導を行ったりすることがよいということも分かった。

次に設定型保育では実態調査の結果から制作活動を行っている学生が一番多く、次にゲーム遊び、感覚遊びと続いていた。そこで主に制作活動について丁寧に指導する必要があるということが分かった。子どもの発達に応じた教材、教具の提示や具体的な作品例の提示、発達段階にあった指導法などを指導する必要があるということが分かった。

最後に指導案についてであるが、主導型保育をするにも設定型保育をするにも計画は必要である。しかし書くことが苦手な学生が多いので、丁寧に指導する必要がある。どのようなねらいを持って、保育を行っていくのか、配慮や援助とはどういうことかなど具体的な事例を基に指導し、何度も書く練習をする必要があると思われる。グループワークを行い、互いに指導案について考え合い、指導案の書き方を自ら身につけていくような機会を事前指導の中で行っていかなければならないということが明らかになった。

2. 本研究の問題

2005年度の調査結果から明らかになった事前指導のあり方を基礎として実際の事前指導を授業の中で行い、具体的で有効的な事前指導について考察していきたい。

本学の保育実習Ⅱは2年生の後期である12月の初旬に毎年実施している。直前の事前指導の時期としては2年生の後期の初め10月、11月となる。本来保育実習Ⅱについては保育実習のように事前指導が独立した単位としてあるのではなく、授業時間が確保されていない。ただし、事務的な指導やオリエンテーションの指導、実習課題の指導などは授業時間を1コマ確保し、スムーズに実習が行えるように配慮している。当然それは単位のある授業ではないので、ガイダンスのような扱いをしており、学生の負担も考えて2年生の後期木曜日の5時限目に設定し、3回程度実施している。しかし、責任実習に対する直接的な事前指導につ

いては新たに時間を確保することは難しく、学生の負担も大きくなる。

私は幸いにも指導法の研究という授業を2年生の後期に担当しており、その時間を利用して具体的な事前指導について行うこととした。当然その授業の目標や内容はシラバスに示されていることであり、まったく関係のない内容ではなく重複する内容であることを申し添えておく。

2006年度、2007年度と2年間に渡って行った事前指導の内容を示し、保育実習Ⅱにおける責任実習の実態調査についても引き続き行い、その結果を考察し具体的に有効的な事前指導について考察したい。

第2章 事前指導の実践1と調査1

1. 事前指導実践1

2006年度後期の「指導法の研究」受講者総数は86名で、クラスは2クラスあり、1クラスの人数は44名と42名である。

主導型保育に関する事前指導授業のねらいと学ばせたい内容は以下の通りである。

ねらい:主導型保育に関する知識を増やし、実践力、指導案作成力を高める。

学ばせたい具体的内容:絵本、紙芝居、エプロンシアター、パネルシアターの特徴を知り、演じ方を学ぶ。また、手遊びのレパートリーを増やし、実習で即実践できるように身につける。

具体的な授業内容は以下の通りである。

- ① 座席表を元にグループを決める(学生は学籍番号順に指定された場所に座り、授業を受けている)
- ② グループ毎に絵本、紙芝居、エプロンシアター、パネルシアターのうちから一つを主導型保育の内容として選び、それと手遊びを一つ組み合わせた指導計画を考え、指導案を作成する。
- ③ 各グループが指導案に基づいて模擬保育を行う。グループの中の代表者が保育者として保育をし、他のグループの学生が子どもの役になる。模擬保育後各自に感想を書かせる。

最後に書かせた感想から、学生は授業のねらいをきちんと意識し、学んでほしい内容を自ら発見

し身につける学生の姿が窺えた。

次に設定型保育に関する事前指導授業のねらいと学ばせたい内容は以下の通りである。

ねらい：設定型保育に関する知識を増やし、実習で実践する力をつける

学ばせたい具体的内容：子どもの発達段階や興味関心に応じた設定型保育の内容や教材、教具などについて学ぶ。

具体的な授業内容は以下の通りである。

- ① 主導型保育のグループと同じメンバーのグループで活動する。
- ② グループ毎に12月に行える制作活動の内容を考える。
- ③ 年齢をそれぞれ設定し、その発達段階に応じた活動を考える。また、その活動に適した教材や安価で手に入る素材や廃材などを取り入れ、実際に作品を作りながら教材研究を行う。
- ④ グループで考えた内容を発表する。

2. 調査1

①目的

保育実習Ⅱにおける責任実習の実施状況を調査し、その実情を把握する。さらに、前回の調査結果を元に事前指導を行った結果、その事前指導が有効であったかどうかをアンケートより考察し、よりよい事前指導について探ることを目的とする。

②方法

a. 調査項目

前回の調査項目と同じ内容で調査を行った。部分実習の実施回数と指導案の有無、具体的内容について問う項目と事前指導として学校に期待することを問う項目を設定した。

b. 調査対象

四條畷学園短期大学保育学科2年生 保育実習に参加した学生67名中 有効回答数 64名

c. 調査時期

保育実習Ⅱ（2006年11月30日～12月10日）終了後、2006年12月13日、14日に実施した。

④結果と考察

a. 責任実習の実施状況

責任実習を行った学生は62名であり、行っていない学生は2名であった。全体の97%の学生が行ったことになる。前回の結果より少し多くなっており、ほとんどの学生が何らかの責任実習を行っているということが分かった。

b. 責任実習の内訳

(1) 総合実習の実施状況

5名の学生が一日の総合実習を行っており、3名の学生が半日の総合実習を行っている。以上合わせて8名の学生が総合実習を行っており、全体の13%の学生が行ったことになる。この結果は前回の結果とほぼ同じになった。

(2) 部分実習の実施状況

60名の学生が一回以上部分実習を行っている。回数別の人数表を表1に示した。回数を5つのグループに分けてその人数を図1に示した。その人数構成比を図2に示した。1～3回というのが全体の約半数であり、次に4～6回が全体の1/4と続いている。この結果は前回の結果とほぼ同様の結果となった。やはり11日間の実習期間では1～3回という少ない回数が学生にとっても実習園にとっても行いやすいということが分かった。

表1. 2007年度 回数別部分実習 実施状況

部分実習回数 (回)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上
人数(人)	4	21	7	5	3	11	3	3	4	0	3

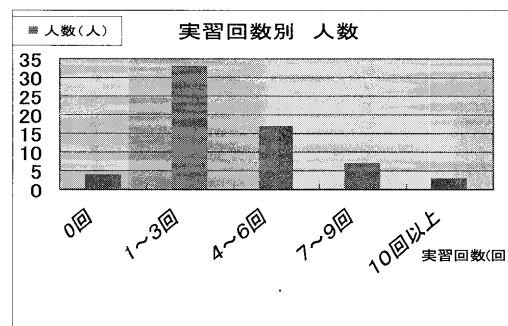


図1. 2006年度 回数別 部分実習実施状況

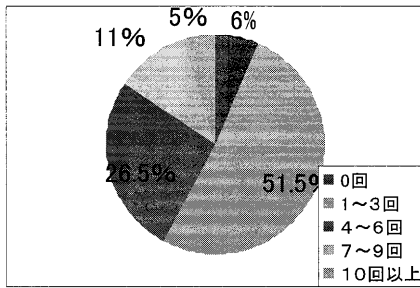


図2. 2006年度 回数別 部分実習実施回数人数構成比

c. 部分実習の内訳

部分実習として主導型保育を行った回数と設定型保育を行った回数を調べた結果、表2のようになった。それを棒グラフに表したものが図3である。

表2. 部分実習回数 内訳

部分実習実施回数 (回)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10 以上
人数(人)	21	7	5	3	11	3	3	4	0	3
総実施回数(回)	21	14	15	12	55	18	21	32	0	31
主導型保育実施回数 (回)	2	5	10	9	44	15	17	25	0	29
設定型保育実施回数 (回)	19	9	5	3	11	3	4	7	0	2

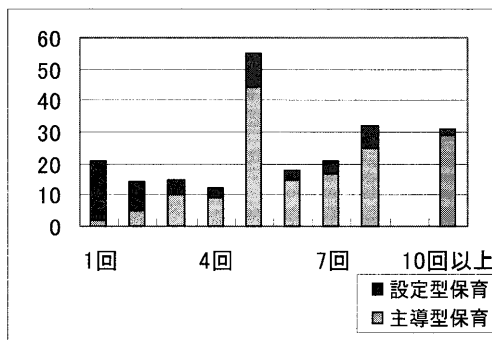


図3. 2006年度 部分実習回数内訳

設定型保育を一回以上行った学生は56名で全体の88%になる。また、主導型保育を一回以上行った学生は39名であり、全体の61%となる。この結果は前回の結果と大きく変わった。前回の結果では圧倒的に主導型保育を行っている学生が多く、一度も設定型保育を行っていない学生が全体の44%もいたのである。前回と違って多くの学生が設定型保育を経験することができたということがわかった。保育実習Ⅱの中では必ず経験して欲しい内容なので、多くの学生が取り組んでいたことが

わかり良い結果となった。

さらに指導案の有無を調べてみると、設定型保育を一回以上行った学生56名の内、55名が指導案を作成しており、ほとんどの学生が指導案を作成しているのがわかる。反対に主導型保育では39名の内、8名の学生が指導案を作成しており、主導型保育の総回数219回の内指導案を作成したのは12回であり、5%と非常に少ないことがわかる。

設定型保育は子どもの発達に合った様々な活動案を練り、準備や環境構成を行い実施するものである。計画は必ず必要なものであることがわかる。また、設定方保育実施後に指導案と実際の動きを照らし合わせて反省を行いスキルアップにつなげていくことができる。このように設定型保育では指導案は必要不可欠なものであるが、主導型保育は時間が短く内容も簡単であるので、指導案の必要性は低いようである。

d. 主導型保育の内容

主導型保育の内容は前回の結果と同じように大きく分けて4つの内容になった。一つは手遊び・歌遊び、二つ目は絵本・紙芝居、三つ目はエプロンシアターや絵カードなど手作り教材、四つ目はその他としてゲームなどである。前回の結果と同様に手遊びをし、その後に絵本や紙芝居を読むというのが多く、学生にとっては行きやすい内容だとわかる。やはりより多くの手遊びや絵本の知識を習得することは部分実習を行うのに役立つ事前指導となることがわかる。さらに手作り教材を使う学生が前回と同様に少なく、多くの手作り教材を作成し、演技の指導を行うことも部分実習に役立つ事前指導となることがわかる。

e. 設定型保育の内容

設定型保育の内容は多い順に制作、ゲーム遊び、新聞や小麦粉粘土などの素材遊び・感覚遊び、音楽リズム、その他の5つにわけられる。前回の結果と同様制作活動が一番多く、クリスマスの時期なのでそれに関連したものを作るという活動が多かった。

f. 学校に期待すること

学校に期待すること(学びたいこと・身につけておきたいこと)を学生に記述してもらった結果、

設定型保育についてのアイデアや取り組み方について学びたいという学生が18名と一番多かった。次に手遊びのレパトリーを増やしたいという学生が11名と続いた。やはり部分実習に関する知識や技術を得たいと考える学生が多いようである。前回の結果では手遊びをたくさん教えてほしいという学生が30名と多かったのに対して、今回の調査1では11名と減っている。これはおそらく事前指導の中でグループ毎に手遊びを考え、模擬保育を行ったことで手遊びをたくさん知ることができ、それが実際の実習で役立ったからであると考えられる。さらに設定型保育に関することでは、具体的なアイデアだけでなく、子どもをひきつける導入方法や援助の在り方など実際に即した方法を学びたいという学生が多かった。中には事前指導の中で模擬保育を行いたいという学生が数名いた。事前指導実践1では主導型保育に関して主に取り組んだので、もっと設定型保育に関して、より具体的で実践的な事前指導を必要としていることが明らかになった。

さらに、指導案の作成指導が6名と三番目に多かった。他にも実習記録の書き方や文章表現力などそれぞれの用途に応じた書くことに対する要望も複数名あり、書く力も育てる必要があるとわかった。

3. まとめと次への課題

2005年度の調査結果から部分実習について丁寧な事前指導が必要であることがわかった。特に主導型保育を行っている学生が非常に多いことがわかり、主導型保育についてその内容をグループで考え、模擬保育を行うという事前指導を行った。そのことで、手遊びのレパトリーが増え実習で活用できたり、実習時の季節にあった絵本や紙芝居を知ることができ、絵本の見せ方や読み聞かせる時の注意事項などを実際の模擬保育者の姿を見て自ら気づき学ぶことができたりしていた。しかし、パネルシアターやペープサートなどの手作り教材を使っただけの模擬保育は学校所有のものを使っただけだったので、自身で持っている学生が少なく実際の実習で使った学生は少なかった。それらの教材としての価値を知ることにとどまってしまったので、今後は手作り教材の作成指導も事前指導と

して行うことが必要であると考えられる。

設定型保育に関しては、今回の調査の結果をみると実施している学生が非常に多かったということと学生の要望も多かったということで今後丁寧な事前指導が必要であると考えられる。実習担当として事前指導の時間は2か月と少なく、あれもこれもという訳にはいかないので、次年度は主導型保育よりも設定型保育に重点を置き事前指導を行う必要があると考えた。

指導案の書き方については2年生の後期ということでいろいろな場面で学習し、実際様々な実習を通して書いているのである程度は理解しているはずである。しかし数回書いただけで完全に理解するというのは非常に難しいものなので、ある程度経験を積んできているこの時期にもう一度基本的なことから教えなおすことで理解が深まると思われる。このことも次への課題となった。

第3章 事前指導の実践2と調査2

1. 事前指導実践2

2007年度後期の「指導法の研究」受講者総数は108名で、クラスは2クラスあり、一クラスの人数は53名と55名である。

実践2では調査1の結果からの課題に基づいて、設定型保育のグループ研究と指導案作成指導に重点を置いて行った。

指導案作成指導に関する事前指導授業のねらいと学ばせたい内容は以下の通りである。

ねらい：指導案を作成する能力を身につける

学ばせたい内容：指導案の各項目に書くべき内容の理解と指導案としてふさわしい表現等を学び、書く力をつける。

学生は指導案を書く際に「何を書いたらいいのかわからない」と言うことが多い。指導案には子どもの生活する姿、ねらい、おもな活動と時間の流れに沿った環境構成、予想される子どもの活動、保育者の援助と配慮という項目がある。それぞれの項目について何を書くのかということを説明する。

まず子どもの生活する姿というのは自分が部分実習をする前日の子どもの姿を観察し、子どもが「今何に興味を持っているのか」や「どのような発

達段階にいいのか」などを捉えて書くものである。そのような子どもの見取りが子ども理解に繋がり、今日の前にいる子どもたちに適した部分実習の内容を考えることができる。

保育は子どもの姿から発信を受け、子どもの興味関心や発達段階に応じた活動を行うことで子ども自らが意欲的、主体的に活動し自ら育っていくことを支える仕事である。また、子どもが知っていることは限られているので、新たな刺激を与え興味を持たせることも必要である。

例えば室内で折り紙をすることに興味を持っている子どもがいるとする。その活動にのめり込みやり続ける姿はとても尊い学びの姿であるので、その子どもの思いが充実するよう環境を整え支援していくことが保育者の役割となる。何日が続けてそのような活動を繰り返すことで子どもは確実に自分の力として体を通して身につけ、納得して自分で終わらせることができる。そういう状況の時に保育者はつつい自分の保育観を押し付け、「今日は天気がいいから」と言って無理矢理子どもを外に引っ張っていくことがあるが、それはよくない援助だと言える。

しかし子どもはいくら折り紙が好きだからと言って一日中または一年中それだけをやり続けるということはある得ない。ただ手持ち無沙汰で、特に興味を惹かれる活動がないときに時間つぶしのように自分の持っている知識や能力を使って遊ぼうとする。そんな時には新たな刺激として外での遊びを教えたり、発達段階に応じた環境を構成したりすることでまた充実した遊びを展開していくことができる。

つまり子どもが今何を求めているのかということ子どもをの姿を観察しキャッチすることで次の保育内容が考えられるということである。その際も活動が偏らないように保育者がいろいろな活動の知識や能力をもちバランスよく発達を遂げられるように支えることが大切である。

このように保育は子どもからの発信を受けて展開していくものなので、子どもの姿を適切に捉えることは必要なこととなる。

しかし、実習生が行う部分実習ではこの部分が難しいと言われている。子どもを理解するためには日々の積み重ねが必要で実習生の10日間ほどのかかわりではそのようなことがわからないのは

当然である。それでも少しでも子どもの姿を観察し子どもたちが興味を持って取り組めるような活動を設定することが重要である。そのために指導案の初めに子どもの生活する姿という項目があり、よく観察し書くこととしている。

ただし養成校で指導案について教える際には目の前に子どもがいないので、自分が持っている発達段階の知識に照らし合わせて、想像で書かせている。

次にねらいであるが、これも書くのが難しいようである。幼稚園教育要領の中の「ねらい」とは『幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり・・・』と書かれている。そのことを基本に考え、指導案に書くねらいは設定した活動を通じて育てたい心情や意欲や態度ということと考えられる。このねらいは大きすぎても細かすぎてもよくないのでどのように設定するのが非常に難しいところである。今後本学の指導案を改善していく必要があると考えており、ねらいは大きく簡潔なものとして、学ばせたい内容として年齢発達やその活動に応じたものを書くという方法も検討している。

次のおもな活動であるが、これは具体的な活動名を書かせることにしている。

次に時間の流れに沿った環境構成であるが、その項目には保育室全体の環境構成図や机、椅子などの配置図、必要な用具や材料などの準備物、制作の場合出来上がりのイメージ図をなど図や言葉で書いている。また、実際の手順や作り方・進め方なども書いておくとより部分実習の内容が明確になる。このように詳細に書くことで実習生自身が実際の保育をイメージしやすくなると共に、実習指導者である保育者にも部分実習の内容が理解してもらいやすいということがいえる。

次に予想される子どもの活動であるが、この項目は具体的な子どもの動きを予測して書くものである。子どもが集合するところから、活動を終え次の活動に移るところまでを考えて書く。

最後に保育者の援助と配慮であるが、部分保育を行うには「導入」「展開」「終了・まとめ」という大きく分けて3つの段階がある。「導入」は子どもたちがこれから行う部分実習に興味を持ち、主体的に取り組むことができるように様々に工夫し行うものである。「導入」時に絵本やペープサート

を使って興味を持たせたり、制作や絵画の場合これから作るものを見せて興味を持たせたりする方法がある。「導入」時に大切なことは子どもたちの知的好奇心をくすぐったり、興味関心を持たせたりして、意欲的に取り組めるよう導くことである。また子どもがやってみたくと思ったことをすぐに自分の力でやり始められるように活動の手順や方法を分かりやすく説明することも大切である。説明の方法は発達段階に合わせて行う必要があり、実際に活動を行いながら説明したり、活動方法を図に示して説明したり、絵人形などを利用して説明したりする方法がある。乳幼児期の子どもは言葉で説明するだけでは不十分なことが多いので、視覚に訴えるような説明方法が有効である。

このように子どもがやりたいと意欲を持ち、そのやり方（活動方法）がわかり、見通しや目的を持つことができれば子どもは自らどんどん活動を進めていくことができる。

子どもの意欲を引き出せなかったり、活動方法がうまく説明できなかったりすると、子どもは他のことをしだしたり、何度もやり方を聞きにくるようになる。すると保育者もその対応に追われてしまい、一人一人の活動を見守ったり良さや頑張りを認めたりする援助ができなくなってしまう。結局ごちゃごちゃになって終わってしまい、充実した活動とはならない。

これだけ「導入」というのは重要であるということがいえる。

次に「展開」であるがここは子どもたちが主体的に取り組めるように援助したり、頑張りを認めたり、困っていることに対して手助けをしたりするところである。子どもの姿をできるだけ具体的に予想し、それぞれにあった援助を考えておくことで、実際にその場面に出くわしたときに慌てずに対応できる。しかし子どもの動きは予想できないこともあり、その場合は自分の持っている力を発揮して臨機応変に対応するしかないのではあるが、指導案の段階ではできるだけじっくり子どもの動きを予測し、かかわり方を考えておくことが重要である。

最後に「終了・まとめ」であるがその活動をどのように終わらせるかということもよく考える必要がある。子どもが「楽しかった」「できてよかった」「またやりたいな」と思えるような活動となるよう

にしめくることが重要である。一人一人の活動を十分に認め、片付けを子どもたちと共にすることでその活動の区切りをつけるということも大切である。制作をしたならその作品をどこに飾るのか、クイズやゲームをしたならその道具をどこにしまうのかなどきちんと考えておくことで、この時間に行った活動が子どもたちの自由活動の中にも取り入れられ、さらに発展することもある。部分実習がよい刺激となって子どもの活動を広げることができれば、それはとても素晴らしいことである。

このような「導入」「展開」「終了・まとめ」を組み立てていき、保育者の援助と配慮を書いているのである。

保育者の援助と配慮に書く表現として、「させる」や「してあげる」などは使わない。強制的に命令しているわけでもなく、目上のものが小さな子どもに何かをしてあげるわけではないからである。よくつかわれる語尾の表現として「誘う」「援助する」「言葉をかける」「共感する」「見守る」「認める」「褒める」などがある。これらの表現を活用することで適切な指導案が書けるということである。

以上のようなことを学生に指導し、実際にホワイトボードを指導案用紙に見立て、具体的な部分実習の案を元に板書しながら指導案を作成していった。学生はその説明を聞きながら、板書を写して学んでいたのだが時々質問をする学生もおり、全体的にどの学生も非常に熱心に取り組んでいた。いかに指導案作成指導が彼女たちにとって必要なことであったのかがわかった。

次に設定型保育に関する事前指導授業のねらいと学ばせたい内容は以下の通りである。

ねらい：設定型保育に関する知識を増やし、実習で実践する力をつける

学ばせたい具体的内容：グループで子どもの発達段階や興味関心に応じた設定型保育の内容を考え、教材研究を行い教材、教具などについて学ぶ。

模擬保育を通して実際の部分実習をイメージし設定型保育のポイントなどを習得し、実習で活かす。

具体的な授業内容は以下の通りである。

① 座席表を元にグループを決める（学生は学籍番号順に指定された場所に座り、授業を受け

ている)

- ② グループ毎に3歳児、12月に行える制作活動の設定型保育の内容を考える。
- ③ 設定型保育に適した教材や安価で手に入る素材や廃材などを取り入れ、実際に作品を作りながら教材研究を行う。
- ④ グループで考えた内容を発表する。
- ⑤ 全体の発表を聞いた後、実際の保育実習で行いたいと思ったグループの発表を投票させて、一番多かったグループが代表して模擬保育を行うことにした。

2. 調査2

①目的

2007年度保育実習Ⅱにおける責任実習の実施状況を調査し、その実情を把握する。さらに、前回の調査結果を元に事前指導を行った結果、その事前指導が有効であったかどうかをアンケートより考察し、よりよい事前指導について探ることを目的とする。

②方法

a. 調査項目

前回の調査項目に部分実習を行う上で事前指導が役立ったかどうかを問う質問項目を追加して調査を行った。部分実習の実施回数と指導案の有無、具体的内容について問う項目と事前指導として学校に期待することを問う項目、さらに「具体的な指導案作成指導」「設定型保育のグループ研究」「模擬保育」について「大変役立った」から「まったく役に立たなかった」の5段階での評価項目を追加設定した。その他の事前指導の有効性を問う質問項目も設定したが本研究の趣旨からはずれるので取り上げないこととする。

b. 調査対象

四條畷学園短期大学保育学科2年生 保育実習に参加した学生69名中 有効回答数 67名

c. 調査時期

保育実習Ⅱ(2007年12月3日～12月14日)終了後、2007年12月18日に実施した。

③結果と考察

a. 責任実習の実施状況

責任実習を行った学生は62名であり、行っていない学生は5名であった。全体の93%の学生が行ったことになる。3年間の調査結果をみると毎年9割以上の実習生が何らかの責任実習を行っているということが分かり、本学が実習内容として実習園に依頼していることを実施していただいていることが明らかになった。12月は生活発表会などの行事を行う園が多く、非常に忙しい時期にもかかわらず、実習生のために時間を作ってくださることに感謝したい。しかし保育実習Ⅱの中で部分実習を一度も経験できなかった実習生がいることも事実であり、今後も実習園をお願いをすると共に個別に本学の中で部分実習が行えるような環境(附属幼稚園での実習・子育て支援のボランティアとしての実習など)を作ることもしなければならないと考えている。

b. 責任実習の内訳

(1) 総合実習の実施状況

4名の学生が一日の総合実習を行っており、1名の学生が半日の総合実習を行っている。以上合わせて5名の学生が総合実習を行っており、全体の7%の学生が行ったことになる。この結果は調査1の結果より半数近く減っている。

(2) 部分実習の実施状況

62名の学生が一回以上部分実習を行っている。回数別の人数を表3に表した。回数を5つのグループに分けてその人数を図4に示した。その人数構成比を図5に示した。1～3回というのが全体の約半数であり、次に4～6回が全体の20%と続いている。

表3. 2007年度 回数別部分実習 実施状況

部分実習回数 (回)	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上
人数(人)	5	11	15	7	2	5	6	1	2	1	12

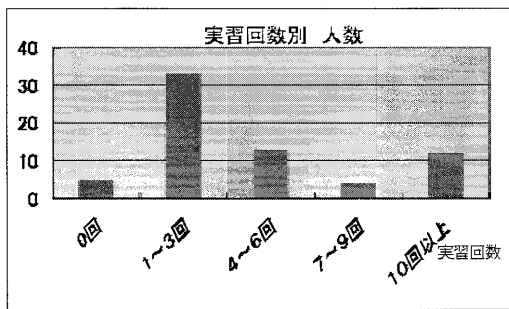


図 4. 2007 年度 回数別 部分実習実施状況

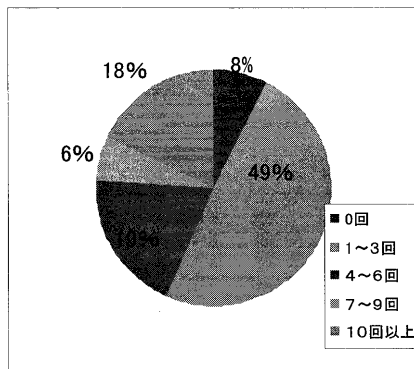


図 5. 2007 年度 回数別 部分実習実施回数人数構成比

表 4. 部分実習回数内訳

部分実習実施回数 (回)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10 以上
人数(人)	11	15	7	2	5	6	1	2	1	12
総実施回数(回)	11	30	21	8	25	36	7	16	9	141
主導型保育実施回数 (回)	3	15	17	6	20	31	7	16	8	128
設定型保育実施回数 (回)	8	15	4	2	5	5	0	0	1	13

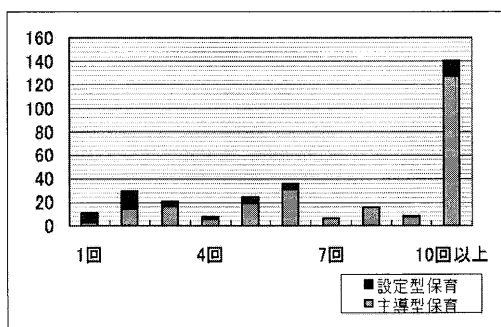


図 6. 2007 年度 部分実習回数内訳

この結果は今までの結果とほぼ同様の結果となった。また今までの結果と大きく異なる点があった。それは10回以上行った学生が12名と非常に多

かったことである。毎日絵本の読み聞かせや手遊びをした学生や中には一日の生活の中で朝の会や昼食時など複数回にわたり絵本を読み聞かせたり手遊びをしたりする学生もいた。こういった学生は何度も経験することで自分なりのよい技術や方法を導き出し習得することができたようである。

c. 部分実習の内訳

部分実習として主導型保育を行った回数と設定型保育を行った回数を調べた結果、表4のようになった。それを棒グラフに表したものが図6である。

設定型保育を一回以上行った学生は47名で全体の70%になる。また、主導型保育を一回以上行った学生は52名であり、全体の78%となる。この結果は今までの結果とはまた少し異なった。設定型保育を実施した学生は2005年度の結果では56%と少なかった。しかし2006年度では88%と増加し、今回は78%と減少した。保育実習Ⅱに関しては実習園を決める際、学生が自分の居住している地域の保育園を開拓する方法をとっている。毎年同じ園で学生が実習を行っている訳ではないのでこのようなばらつきが見られるのだと考えられる。できるだけ全員の学生が設定型保育を経験できるように今後とも実習園との連携を図り、設定型保育の経験ができるよう依頼していく努力が必要だと思っている。ただ、2005年度の結果に比べ、2006年度と2007年度の実施が増えたのは、事前指導の成果とも言える。

さらに指導案の有無を調べてみると、設定型保育を一回以上行った学生47名の内、46名が指導案を作成しており、ほとんどの学生が指導案を作成しているのがわかる。反対に主導型保育では52名の内、10名の学生が指導案を作成しており、主導型保育の総回数251回の内指導案を作成したのは12回であり、5%と非常に少ないことがわかる。

この結果は今までの調査と同じ結果となり、設定型保育をする上では計画は必ず必要なものであることがわかる。また反対に主導型保育では綿密に計画を立てなくても手軽に子どもたちに対して取り組める部分実習だということがわかる。

d. 主導型保育の内容

主導型保育の内容は今までの結果と同じように大きく分けて4つの内容になった。一つは手遊び・

歌遊び、二つ目は絵本・紙芝居、三つ目はエプロンシアターや絵カードなど手作り教材・四つ目はその他としてゲームなどである。今までの結果と同様に手遊びをし、その後絵本や紙芝居を読むというのが多く、学生にとっては行いやすい内容だとわかる。今回は事前指導の中で主導型保育を取り上げることはできなかったが、今までの様々な授業や実習の経験からいろいろな知識を得て、それを活用している姿が窺えた。さらに手作り教材を使う学生が今までと同様に少なかった。この点については2年生の後期では時間がないので、1年生の段階から多くの手作り教材を作成し、演技の指導を行うことが必要だと考えられる。

e. 設定型保育の内容

設定型保育の内容は多い順に制作、ゲーム遊び、新聞や小麦粉粘土などの素材遊び・感覚遊び、音楽リズム、その他の5つにわけられる。今までの結果と同様に制作活動が一番多く、クリスマスの時期なのでそれに関連したものを作るという活動が多かった。

また模擬授業で行った内容をヒントにして、実習時の年齢に応じた内容を考え実践する学生も多かった。

f. 学校に期待すること

学校に期待すること（学びたいこと・身につけておきたいこと）を学生に記述してもらった結果、記述なしやなしというのが26名と一番多かった。これは事前指導に対して満足しているというふうにも取れるが、真相はわからない。次に手遊びのレパートリーを増やしたいという学生が12名と多かった。事前指導実践2では設定型保育を中心に行ったので、このような要望が多かったのであろう。次に設定型保育のアイデアについて知りたいというのが続いた。また、調査2の結果の特徴として、学校に期待することの内容が、部分実習にかかわることではなく、乳幼児の発達に合った遊びや子どもへの言葉かけ、かかわり方など直接子どもと生活したり遊んだりする際に必要な技術にかかわることが増えたということである。これらのことから、部分実習に関しては自分なりに実践できたことが自信になり、もっと本質的な保育内容について学びたいと思えるようになったのだと

も考えられる。やはり部分実習は学生にとって大きな課題となるものなので、事前指導実践2で行った内容をさらに深めて、実践していくことが必要だと思った。

g. 事前指導が役立ったかどうかの結果

「具体的な指導案作成指導」「設定型保育のグループ研究」「模擬保育」について「大変役立った」から「まったく役に立たなかった」の5段階での評価を行い、表5のような結果になった。また人数比率を表したものが図7である。これらの結果には無回答は含まれていない。

「具体的な指導案作成指導」に関しては40名の学生が「役に立った」または「大変役に立った」と回答

表5 事前指導アンケート結果

	まったく役立たなかった 1	役立たなかった 2	どちらでもない 3	役立った 4	大変役に立った 5
指導案指導	6	4	14	26	14
	9.4%	6.3%	21.9%	40.6%	21.9%
グループ研究	2	3	18	25	16
	3.1%	4.7%	28.1%	39.1%	25.0%
模擬保育	1	4	17	17	23
	1.6%	6.5%	27.4%	27.4%	37.1%

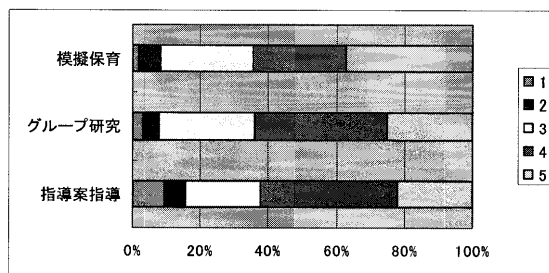


図7 事前指導アンケート結果 人数比率

しており、62%の学生が役立っていたことがわかった。「設定型保育のグループ研究」に関しては41名の学生が「役に立った」または「大変役に立った」と回答しており、64%の学生が役立っていたことがわかった。「模擬保育」に関しては「具体的な指導案作成指導」と同様に40名の学生が「役に立った」または「大変役に立った」と回答しており、65%の学生が役立っていたことがわかった。

第4章 まとめ

1. 事前指導のあり方を考える

事前指導実践1,2と調査1,2の結果と考察を踏まえて事前指導のあり方について考えたい。

3年間の調査で共通して部分実習を90%以上の学生が取り組んでいることがわかった。学び多い部分実習にするために事前指導は不可欠である。

部分実習の実施回数はどの調査でも1~3回というのが半数であり、その次に4~6回と続いていた。11日間の実習期間ではやはり1~3回行うというのがベターであると思われる。一度も部分実習をしなかった学生も1割に満たない割合であるということもわかったので、今後実習を依頼する際に設定型保育1回、主導型保育1回は最低の基準として実施していただけるようお願いすることも検討したい。

これまでの結果から今後の部分実習の事前指導について考えられることをまとめてみる。

まず、主導型保育についてであるが、手遊びのよさを伝え、レポトリーを増やすことと絵本(紙芝居)の価値を伝え、季節や発達段階にあった絵本(紙芝居)のレポトリーを増やすことがある。手遊びも絵本(紙芝居)もレポトリーを増やすと共に、演じ方や読み方を実際に実演することで身につけるといことが重要である。また、手作り教材として、パネルシアターやエプロンシアター、ペープサート、グローブ人形などを作成しそれを使って学生が模擬保育を行うというものよい事前指導と考えられる。しかし保育実習Ⅱの事前指導として2年生後期の2か月という限られた期間に行うのは無理があり、これは1年次の保育実習事前指導より計画的に行うことが重要である。そして、保育実習Ⅱの直前の時期に今まで得た知識や技術を互いに共有し合えるような時間を持ち、総復習することで即実践に活かせるものとなると考えられる。

次に設定型保育では調査の結果一番多く取組まれていた制作活動について事前指導を行った。グループ研究とし、子どもの発達や興味関心に応じた教材、教具を調べ制作活動に取り組める作品を作成しながら教材研究を行った。子どもの姿を予想しながら、子どもに伝えたい技法や文化など

を考え教材研究を行うことは保育者として非常に楽しい作業である。グループの仲間と意見を出し合って案を練っていくことはとてもよい経験となり深い学びを得ることができる。こうして学生が主体的に取り組むことができたので多くのことを学んだようである。

そして模擬保育であるが、実際の保育場面を想定し、学校の教室を保育室に見立てて、環境構成を行い準備も万端にして行った。保育者役は1名で、子ども役は20名、その他の学生は参観者ということにした。実際やってみることで多くの気づきがあった。「絵本の内容が導入としてよかった」「材料の渡し方を工夫すべき」「3歳の発達に合わせる場合はもう少し準備が必要」「一人一人を認めるような声かけはよかった」など学生は配布された模擬保育の指導案にその保育についての良い点・改善点などを書いており、自分の設定型保育を考える際に役立ったと思われる。このようなグループ研究で学生自ら調べ、話し合い、実践し、教員が適切な評価をするという方法での指導はとても有効であることがわかったので、今後もグループ研究を基本として進めていくことが良いと思われる。

次に指導案についてであるが、これまで保育実習や教育実習を経験している学生が多く、指導案というものについてはわかっている。また、実際に書いてきてもいる。しかし、参考資料を真似たり、写したりして書く学生も多く、指導案とは何をどのように書くのかということは十分に理解していない学生も多い。そこで、もう一度基本に戻り一つ一つの項目の説明と共に実際に指導案を作成しながら指導することで「なるほど」「そういうことだったのか」と納得のいく理解ができる。この基本の指導をした後に、先ほどの設定型保育の内容を考え、グループで話し合いながら指導案を練っていくという活動をしたことで、指導案作成についてはよく理解でき実習時も自分で考えて書くことができたようである。

指導案を書くのは非常に難しく、学生の中に完全に理解できるものではない。保育現場に出て何度も書くことで理解できるようになってくるものである。ましてや実習の経験がない1年生の前期に説明してもまったく理解できないのは当然のことである。しかし、1年生の段階から説明を繰り返し、実習経験を積んだ後に総復習するというこ

には非常に意味があるということがわかった。今後も保育実習Ⅱの事前指導として丁寧な指導案の指導を行っていききたい。

2. 今後の課題

「具体的な指導案作成指導」「設定型保育のグループ研究」「模擬保育」について「大変役立った」から「まったく役に立たなかった」の5段階での評価を行った結果、「具体的な指導案作成指導」に関しては、62%の学生が役立っていたことがわかった。また、「設定型保育のグループ研究」に関しては、64%の学生が役立っていたことがわかった。最後に「模擬保育」に関しては、65%の学生が役立っていたことがわかった。この数字の中には、部分実習を行っていない学生も含まれており、そのような学生には役立つことはなかったと思われる。部分実習を行った学生に絞った場合もう少しこのパーセンテージは上がると思われる。これらのことから以上の3つは事前指導として有効であったと考えられる。今後はより多くの学生にとって役立つ事前指導となるように以上3つの事柄について指導内容・指導方法の改善や適切な評価を行うなど更なる努力をしていきたい。

また「設定型保育のグループ研究」に関しては制作活動のみで内容を考えていたので、運動遊びやゲーム遊び、素材・感覚遊びなど様々な内容についても広げていき、乳幼児期にふさわしい設定型保育の内容について研究することができればと考えている。

「模擬保育」に関しては各クラスで1グループしかできなかったのもう少し増やしていきたいと思う。そうすることで、いろいろな保育を比較検討し、よりよい実践について考えていく力をつけていきたい。

保育実習Ⅱにおける責任実習の中でも部分実習について事前指導のあり方を探ってきたが、2年生後期の2か月では時間が短くできることに限りがあるので、1年生からの事前指導をもう一度見直し、保育実習Ⅱへの見通しも持ちながら2年間で計画的に指導していく必要性を強く感じた。今後取り組んでいきたい課題である。

引用文献

山田秀江 「保育実習Ⅱにおける責任実習に関する事前指導について－責任実習の実際から見た事前指導のあり方－」 2006年5月31日 『四條畷学園短期大学紀要 第39号』(p20～28)
文部科学省 幼稚園教育指導要領 (p 4)

－ 2008. 2. 20 受稿、2008. 2. 24 受理－